

## 中途盲ろう者のコミュニケーション変容の経験に関する研究

著者	柴? 美穂
学位授与年月日	2016-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00073213">http://doi.org/10.15083/00073213</a>

## 審査の結果の要旨

氏名 柴崎美穂

第1章では本研究の目的を述べた。途中で盲ろうになるとコミュニケーションに困難が生じることは明らかにされているが、盲ろう者のコミュニケーションの困難の変容を、盲ろう者の人生経験から明らかにした研究は世界的にもほとんど例がない。そこで、本研究では、中途盲ろう者のコミュニケーションにおける困難の変容およびそれが盲ろう者と周囲の「世界」とのつながりにもたらす影響を明らかにすることを目的とした。

第2章では研究方法について述べた。本研究では、社会学領域におけるライフストーリー研究と質的心理学領域で近年注目される「語り合い」手法を複合させた独自の研究方法を用いた。すなわちまず、3名の盲ろう者に筆者がライフストーリー・インタビューを行い、次に、この3つのライフストーリーについて他の盲ろう当事者3名と筆者が「語り合い」を行った。さらに、こうして得たライフストーリーとその解釈について、盲ろう当事者でもある研究者と筆者がメタレベルの「語り合い」による共同解釈を行うという重層的な研究方法を用いた。

第3章から第5章では3人の盲ろう者へのライフストーリー・インタビューの結果を記した。第3章でとりあげた弱視難聴で後天視覚障害・先天聴覚障害の女性Aさんは、視覚・聴覚それぞれの障害が段階的に進行する中で、適応と再適応を繰り返しながら生きてきた。とりわけ、自身の状態を「目も半端、耳も半端」という言葉で表現し、「半端さ」ゆえの困難を具体的に語った。

第4章でとりあげた弱視難聴で先天視覚障害・後天聴覚障害の男性Bさんは、高等学校卒業まで適切な福祉用具を十分に得ない状態で生活していた。大学在学中に「障害補償」と「情報保障」という2つの概念と出会うことでいったん自信を回復したものの、就職後、これらを通して自らの能力を発揮するという理想と現実とのギャップに直面する。そしてそのギャップを自分の過剰な努力で補おうと「無理」をし続けるというディレンマの中で生きてきた。第5章でとりあげた全盲ろうで後天視覚障害・後天聴覚障害の女性Cさんは、自身が失聴後に習得した指文字という会話手段を家族が「覚えてくれない」ことへの怒りや不満を語る反面、「自分は他者の力を借りずに自分の力で立ち直った」というストーリーを自らに言い聞かせるように繰り返し語った。

第6章では他の3名の盲ろう当事者との語り合いによる共同解釈を行った。Aさんのライフストーリーについて、弱視ろうで後天視覚障害・先天聴覚障害の女性Dさんと筆者が語り合いを行い、Dさんは、Aさんの体験との間に共通性も非共通性もありながら、自身の「見えにくい」状況をAさんの「聞こえにくい」状況に置き換えて理解しようとする語

りがみられた。

Bさんのライフストーリーについて、弱視難聴で先天視覚障害・後天聴覚障害の女性 Eさんと筆者が語り合いを行い、Eさんは、自分の見え方や聞こえ方を自分で把握することが難しいために、どこまでを「障害補償」で補うことができるかという限界が明確でなく、「できない」ことを自分の責任ととらえ「がんばりすぎてしまう」というディレンマを語った。

Cさんのライフストーリーについて、全盲ろうで後天視覚障害・先天聴覚障害の男性 Fさんと筆者が語り合いを行い、Fさんは、周囲の状況の変化や会話が Fさんに伝わらず、結果的には存在を無視されたと同然の事態が生じる、という経験が無数にあることを語り、自分の存在を周囲から認められない状況への Cさんの怒りに共感を示した。

第7章では他の研究者との「語り合い」による共同解釈を行った。A、B、CさんのライフストーリーおよびD、E、Fさんとの語り合いによる共同解釈について、盲ろう当事者でもあり研究者でもある福島智氏と筆者がメタレベルの語り合いによる共同解釈を行った。その結果、「コミュニケーションの困難」と「存在の承認」という2つのテーマが抽出され、「他者から存在を承認される」ことがなければ「世界」とのつながりが得られないという解釈に結びついた。

第8章では総合考察を行った。本研究では、だれがだれに対してどういう文脈で語っているかという、いわば認知上の「ベクトル」を把握するという意味で、「コミュニケーションの定位」という新たな概念を提起し、さらに、「他者からの存在の承認」があって初めて「コミュニケーションの定位」がなしえるという関係性を示した。すなわち、「他者からの存在の承認」がなければ「コミュニケーションの定位」ができず、コミュニケーション行為そのものが成り立たない。その状況が継続すると、コミュニケーションを求める欲求自体が希薄になり、「世界」とのつながりを実感することが困難になる可能性があるということである。中途盲ろう者の支援においては、コミュニケーション手段の変更といった技術的な側面だけにとらわれるのではなく、「コミュニケーションの定位」と「存在の承認」を視野に入れ盲ろう者を理解することが重要であることが示唆された。このように、本研究は社会学と心理学の研究手法を複合しつつ、独自の重層的な研究を展開することによって、障害学およびコミュニケーション論研究に新たな知見を提供した。

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。